

青森県立五所川原農林高等学校

6次産業研究室

12 つくる責任
つかう責任1 貧困を
なくそう

高校生ボランティア・アワード2021



活動テーマ

地域資源「青森りんご」を活用した
フードバンクプロジェクト～子ども食堂に旬の農産物を届けるための
仕組みづくりと実践～

活動概要

私たち6次産業研究室は、自分たちで育てた「青森りんご」を活用してフードバンクを立ち上げ、県内で子ども食堂を運営する団体に農産物や加工品を届けていきます。

これはSDGsの「ゴール12 つくる責任 つかう責任」を果たし、「ゴール1 貧困をなくそう」に挑戦するプロジェクトです。具体的には以下の2点を実施していきます。

(1) 青森りんごを子ども食堂に届けること

私たちは授業で、誇りをもって「青森りんご」を栽培しています。しかし、どんなに適正な栽培管理をしても、かたちや大きさが出荷基準に合わないりんごが生まれます。

私たちはそのようなりんごにも高い価値があると考え、旬のりんごを子ども食堂運営団体に届けます。(今秋実施予定)

(2) 青森りんごの農産加工品を開発し、その売上で

準備した旬の地域農産物を子ども食堂に届けること

私たちは農業の6次産業化について研究しています。農産加工にも取り組んでいます。そこで上記の目標を達成するため、管理実習で廃棄される「果肉まで赤いりんご“御所川原”」の未成熟果から色素を抽出して、それを活用したりんごジャムを開発中です。

私たちは上記の商品化へ取り組み、その売上を使って津軽地域の農業経営者から規格外の旬の野菜やお米などを購入し、子ども食堂運営団体に届けます。(今秋実施予定)



【私たちの志】

農業高校生の強みを生かし、
青森県津軽地域の「子どもの
貧困問題」解決に挑戦する！

みなさんは「**子どもの貧困**」という言葉を知っていますか。日本には、**様々な事情によってバランスの取れた食事をとれなかったり、教育機会が得られない子ども**がいるのです。厚生労働省は**日本の「子どもの貧困率」(17歳以下)を14%**と発表しています。

以下の図は厚生労働省の国民生活基礎調査による相対的貧困率を示しています。ある一定基準(貧困線)を下回っている世帯は貧困状態にあります。

図 所得ベースの相対的貧困率の推計方法
(参考 貧困統計ホームページ <https://www.hinkonstat.net>)



しかし、**子どもの貧困は「見えない貧困」**と言われます。その理由は、**親に貧困の自覚がなかったり、それを自覚していても周りの目を気にして支援を求められないことがあるから**です。そのため、子ども食堂の多くは対象者を限定せず、地域の誰もが利用できます。

一方で多くの**子ども食堂は食材の確保に課題を抱えている**ことがわかっています。**私たちはその困り感を解決するため、栽培から加工、販売まで取り組む農業高校生の強みを生かし、日本の農業高校初となるフードバンクプロジェクトを立ち上げました！**

キーワード

「農業の福祉的機能」

(1) フードバンクとは

消費者庁はフードバンクを以下のように定義しています

包装の印字ミスや賞味期限が近いなど、食品の品質には問題ないが、通常の販売が困難な食品・食材を、NPO等が食品メーカーから引き取って、福祉施設等へ無償提供するボランティア活動です。

米、パン、めん類、生鮮食品、菓子、飲料、調味料、インスタント食品等様々な食品が取り扱われています。

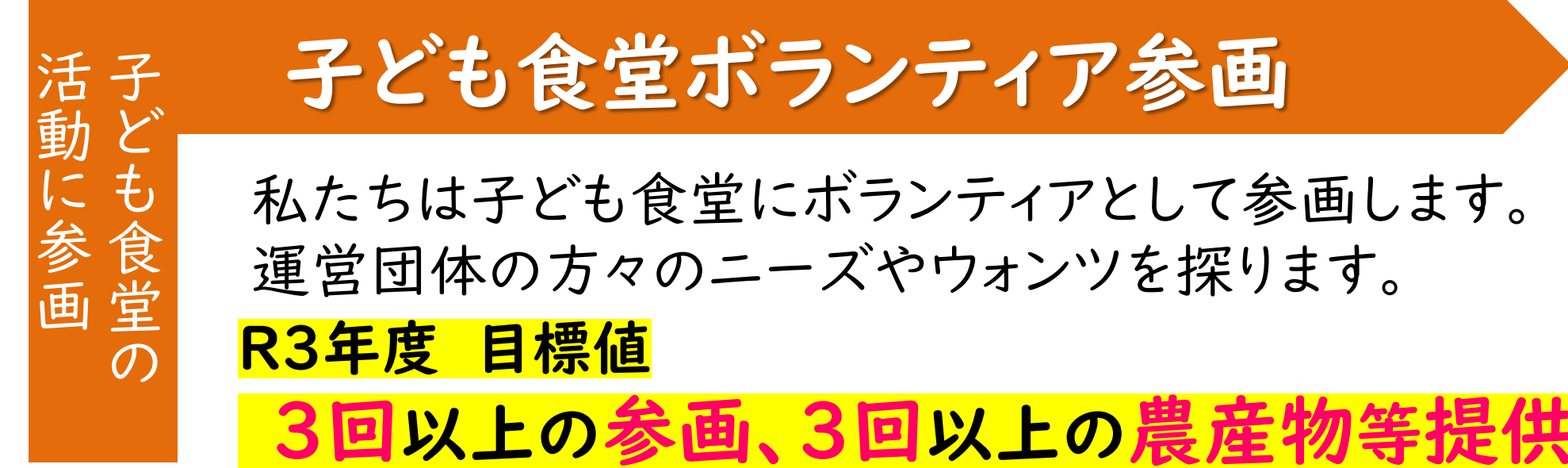
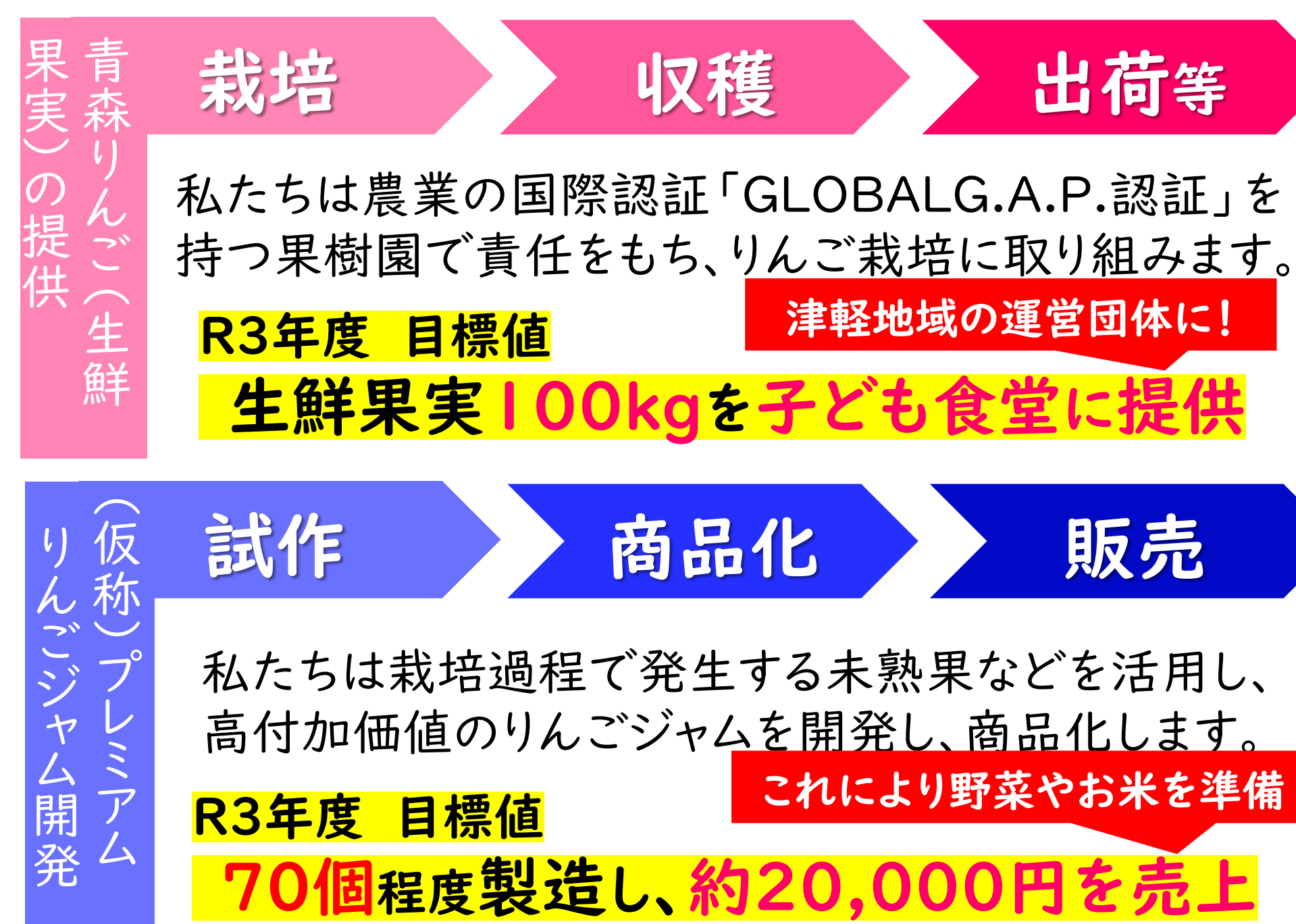
(引用 消費者庁HP https://www.caa.go.jp/policies/policy/consumer_policy/information/food_loss/foodbank/)

農林水産省によると、日本のフードバンクは全国に136団体あります。その内訳は6割がNPO法人、1割が社会福祉法人、1割がその他の法人、2割が法人格のない任意団体となっています※1。



私たちのフードバンクは農業高校の研究室が活動母体となります。農業高校生として、自分たちが栽培するりんごなどの規格外品を保存し、子ども食堂運営団体に提供していきます。

(2) 令和3年度フードバンクプロジェクト 活動フロー



(3) 私たちが「支援する団体」と「協力してもらう団体」

①私たちは現在、五所川原市で毎月1回開催されている**子ども食堂「ここまる」(チームなないろ主催)**への**農産物支援**に向けて活動を進めています。この活動を基本として、実績を積むことにより津軽圏域で子ども食堂運営に取り組む団体にも支援の輪を広げていきたいと考えています。

②私たちは青森県の子どもの貧困問題対策に取り組んでいる**弘前大学の先生や大学院生に協力**をいただいております。今後は五所川原市福祉部や五所川原市社会福祉協議会、県内の大学ボランティアセンターなどにも相談をしたいと考えています。

③私たちは**市内の農業経営者**に活動内容をプレゼンし、規格外品等の提供に協力していただけるように努めていきます。そして保管から提供までを行うフードバンクの機能を発揮します。

(※1 引用 「平成31年度持続可能な循環資源活用総合対策事業 フードバンク実態調査事業報告書」公益財団法人流通経済研究所、令和2年3月)

「子どもの貧困問題」=どの地域でも起こっている「見えない」課題！
私たちは、子ども食堂運営団体が困り感を感じている
“食材の確保・保存・提供”に応える農業高校フードバンクを目指します！

【上記の理由 ～聞き取り調査からわかったこと～】

(1) 子ども食堂運営に関する困り感

子ども食堂運営に取り組むチームなないろ(代表 川村さん)に、**運営の際の困り感**を調査したところ、「**食材の確保**」と「**保管場所がない**」ということが分かりました。また、来場してくれる皆さんには**津軽地域の旬の農産物を味わってみたいというニーズ**があることもわかりました。

私たちは農業高校生として、水稻、野菜、果樹栽培に取り組んでおり、**規格外だけど味はおいしい旬の野菜がたくさん出てくこと、収穫した農産物の冷蔵保管を常に行うことができるという強みを持っていることに気が付きました。**私たちはこの強みをフードバンクに活用していきます。

(2) 子ども食堂における「食材」の意義

子ども食堂では、「食事」をきっかけに年齢や性別、障害の有無を問わず多くの人が集まります。私たちのような高校生がボランティアで参加し、小さな子供たちと活動することは、普段家ではできない経験を積ませてあげられるということでした。また、子どもを連れてきた親は、普段人に相談できないことを話したりすることで心が楽になる居場所になっているということが分かりました。この経験は私たちに、食事のもととなる**「魅力的な食材を提供することの大切さ」を実感**させてくれました。

以上のことから、私たちは**青森県の地域資源であるりんごを活用し、子ども食堂運営団体を支援するため、農業高校生によるフードバンクプロジェクトを推進していきます。**そして、津軽地域の人々に寄り添う活動をしていきます。

集合写真

青森県立五所川原農林高等学校
6次産業研究室プロフィール

本校は明治35年に北津軽郡立農学校として設立され、昭和23年に青森県立五所川原農林高等学校となった。昭和47年には、文部省よりA型自営者養成農業高校(現在は経営者育成農業高校と名称が変更)に指定され、昭和49年に大規模農業のスペシャリスト育成のために、現在の地に移転した。近年の成果では、2015年に本校の果樹園が「GLOBAL G.A.P. 認証」(農業に関する国際水準の認証制度)を日本の農業高校として初めて取得し、その取組が全国の農業高校に広がったことが挙げられる。

全校生徒は398名おり、生物生産科、環境土木科、森林科学科、食品科学科の4学科がある。6次産業研究室は生物生産科2・3年の20名で研究活動へ取り組んでいる。